

新年明けましておめでとうございます。

職員の皆様方には、平成 29 年という輝かしい年をご家族揃ってご壮健にてお迎えになられたことと、心からお慶びを申し上げます。

昨年は皆様方にはそれぞれの担当において職務に精励していただき、町勢の進展に、そして住民の皆さんの福祉の増進に大変なご尽力をいただきましたことを心から感謝を申し上げます。皆さんおかげをもちまして、また、住民の皆さんあるいは各団体の皆さんのお力をいただきまして昨年も、大きな成果をあげることができた 1 年でした。

例えば、NPO 法人の「街のひろば」が学習支援において埼玉県のグローバル賞を受賞いたしました。読み愛・読書のまち宣言そして世界農業遺産も 3 市 1 町で再申請をさせていただきました。またスマイル弁当も完成し、販売を開始しました。そのほか多くの事業をしっかりと皆様方には実施していただきましたことを心から感謝を申し上げます。特に三芳町では第 5 次総合計画が完成し、人口減少社会においていかに活力ある魅力あるまちをつくるかそのビジョンが出来上がり、まさに愛するふるさと三芳町のために新たなスタートを切った 1 年でした。

そうしたなか、若い人の活躍も非常に目立ちました。唐沢小学校 3 年生の宮腰くんが第 35 回児童画の全国コンクールで文部科学大臣賞を受賞されました。藤久保中学校 3 年生の鈴木さんが税の作文コンクールで国税庁長官賞をいただき、またスポーツの分野では大学 3 年生の勝俣くんが、高校 1 年生の岩崎さんが日本オープン、日本女子オープンそれぞれ出場されました。そして大学 2 年生の小笹くんが昨年、今年と箱根駅伝で活躍されました。こうした若い人の活躍は三芳町の未来に希望と光を感じさせてくれます。昨日より今日、今日より明日へとさらに飛躍してほしいと思います。また、我々もそんな思いでまちづくりに励んでいく必要があると感じています。

まちづくりを進めていく上で何よりも大事なのは私たち自身が高い志・目的を持って自身を高めていくことです。京セラ・第二電電の創業者で日本航空の名誉会長をされている稲盛和夫さん。この方は今、80 歳を越えてもなお経営に関する講演などをされている方です。人生において結果あるいは仕事において結果を残すにはひとつの方程式があると言ってい

ます。考え方×熱意×能力これらをかけあわせて人生においてあるいは仕事において結果を残せると言っています。能力というのは知能であるとか体力であるとか生まれもつての先天的な資質。熱意というのは努力とか情熱といった後天的なものです。そして考え方というのは哲学とか思想とか倫理観といったその人の生き様を含んだような人格そのものが考え方という風にとらえています。例えばAさんという方がいます。大変能力もあって健康で90点くらいの方だとします。しかしながらその能力に甘んじて過信して努力を怠ってしまった場合、熱意が30点、90点×30点で2,700点。一方Bさんという方がいらっしゃって、この方は平均よりも能力がちょっと上なのかなと自分で思っています。そんな自分だからしっかりと努力してがんばっていこうということで一生懸命仕事に励みます。能力が60点、熱意が90点、60×90で5,400点になるわけです。能力が仮に低かったとしても熱意でそれをカバーできるということを言っています。そして大事なのが考え方です。能力・熱意というのは0点か100点なんですけれども、考え方というのはマイナス100点からプラス100点まで幅があります。同じBさんでも考え方がプラス10点だとしたら54,000点。考え方がマイナスだとマイナス54,000点。考え方とはどういったものかということ、プラスの考え方は前向きに生きるとか明るいとか積極的だとか優しい、頑張れる、謙虚であるこういったことが非常に大事であると言っています。自身が80年近く色々な人、企業を見てきた結果、この方程式に間違いはないという確信を持っておられると言っています。そういった意味では正しい考え方で前向きに仕事をする事で大きな成果を誰でもあげることができるのです。そしてその根底に少しでも地域をよくしていこう、多くの人に幸せになってもらおうという祈りのようなものが大事なのだと思います。

今年の広報みよしの1月号に坂村真民さんの詩を紹介させていただきました。「念ずれば花ひらく」という詩です。坂村真民さんのお父さんは早く亡くなりお母さんが女手一人で長男の真民さんはじめ5人の子どもを育てられました。大変苦勞されたそうです。普通でしたら「辛い苦しい」と言うかわりに真民さんのお母さんは「念ずれば花ひらく、念ずれば花ひらく」と言っていたそうです。

念ずれば 花ひらく 苦しいとき 母がいつも口にしていた
このことばを わたしもいつのころからか となえるようになった
そうしてそのたび わたしの花がふしぎと ひとつひとつ ひらいていった

という詩です。私も真民さんの詩には大変感銘を受けております。坂村真民さんは仏教詩人で50歳のときに宝巖寺という愛媛県の一遍上人さんの立像があるお寺があります。坂村真民さんはその一遍上人を師とし仰ぎ、その中に生きていきたいと思っていたそうです。一遍上人さんは皆さんご存じのとおり鎌倉時代の時宗の開祖です。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏という言葉唱着遊行しながら多くの人を救いたいということで、60万人の人を救おうということで札を作ってそれを配ってまわりました。坂村真民さんはその宝巖寺というお寺に行って一遍上人さんの立像の足に触れ、私も一遍上人さんの道と一緒に歩んでいきたい、歩んでいこうと思ったそうです。その立像は鬼気迫るものがありまして裸足で破れた衣を着て一歩足を前に踏み出して念仏しながら歩いている大変感動的な、そして真剣に生きてこられた方の姿がそのまま現れている立像でございます。それを見られて真民さんはそう覚悟されて詩国という詩誌を毎月出されて多くの方に配っておられました。

私も真民さんに憧れて色々な本を読んできたわけですがけれども、皆さんもそうかもしれませんが人生には色々な転機があるかと思えます。

有名な孔子の論語でも、

われ十五にして学に志し、三十にして立つ、四十にして惑わず、五十にして天命を知る、六十にして耳順う、七十にして心の欲する所に従えども、のりをこえず

という言葉があって、これは孔子が自分の人生を振り返って感じたことであって、我々と同じであるとはいえないのですけれども、節目節目では色々な人の転機というのはあるのかなと思っています。自分の人生を振り返ってみても三十の時なんとなく立つことはできなかったけれど自分の立ち位置が見えてきてどっちのほうに歩いていったらいいかというのが見えてきたように思っています。しかしながら自分の中で覚悟というか本当の自信というものは持てませんでした。

そんな時、今まで読んでいた真民さんにお会いしたいと思って三十の半ばを過ぎてご自宅にお邪魔いたしました。優しく迎え入れてくれてそこで少しお話しをさせていただきました。実は自分はこんな状況なんですとお話しをしましたら、うんうん、と聞いてくださいまして、ちょっと待っててくださいということで奥に入って「念すれば花ひらく」と

いう色紙とそして短冊をくださったわけであります。それ以来自分の心の中でひとつの自信というか信念というのはしっかりと築かれたような気がしています。

念ずれば花ひらくというのは祈りでもあります。思いでもあります。それをずっと思い続けていれば必ず花はひらくんだなということを自分自身では思っています。ただ、別の詩で真民さんはこんな風にも言っています。花は一瞬にして咲かない、大木も一瞬にして大きくはならない。一日一夜の積み重ねの上にその栄光を示すのである。一日一夜の積み重ねをしっかりとすることによって花はひらくんだということを言っておられます。

我々自身も今それぞれの職務において町勢進展のために、そして住民の皆さんが幸せになるように頑張っているわけですがけれども、やはりその根底には祈りというものがなくてはならないのかもしれないかもしれません。ただ与えられた仕事をこなしてだけでなく本当にそのために祈るような気持ちで仕事に励むことによって大きな成果を上げることができ、我々自身も職務を通して幸せになれるのではないのかなと思っているところでもあります。

第5次総合計画がスタートいたしました。まさに2年目からはその計画を運営化していく年です。ぜひともそれぞれの皆さんが自分の使命を再度確認していただき、自分の心の中に祈りという気持ちがあるのかなのかそのことを考えていただきながら祈るような気持ちで仕事をしていただくことによってこの町は発展をしていくのだと思います。

私も初心にかえってしっかりと町勢進展のために努力していきたいと思いますので、ぜひとも皆さんのご尽力ご理解を賜りますよう心からお願いを申し上げます。そして何よりも健康が第一です。健康には十二分にご留意され、仕事に励んでください。1年間私も頑張りますので、どうぞよろしく願いいたします。